

令和3年度 第38回全国高等学校体操競技選抜大会（熊本県）

男子体操競技審判員報告

審判長 高橋 孝徳

第38回全国高等学校体操競技選抜大会が熊本県熊本市で開催されました。新型コロナウイルスのまん延による状況の中、感染拡大防止の対策にも労力を割いていただき、無事に大会を開催して頂きましたこと、開催地熊本県の関係の皆さまに感謝申し上げます。

コロナ禍の状況により練習日数や時間、活動場所の制限が設けられ、思い通りに準備ができない学校も多くあったと報告を受けています。この様な中で選手たちは創意工夫を凝らし練習へ取り組み試合に臨んでくれたことと思います。

今回は2022年版採点規則を採用した国内におけるはじめての全国大会でした。新ルールの浸透が適切にされているのか、その中でどのような演技がみられるのか、多くの関係者の注目を集めました。

新ルールでは採点規則に掲載されている技数が大きく減少し、種目によっては特別な繰り返し条項が新たに設けられるなどの影響により、実施する技や演技全体のモノトニー化が一層進んだように感じました。演技構成が似通る中で上位に入るには、より美しく、正確に、安定感のある実施が求められますが、今回、Eスコアの評価が高く得られた演技は多くはありませんでした。大欠点や落下、予定した技を遂行出来なくなったと思われる演技が後半種目で多く見られたことは練習時間の制限等による通し込みの不足が影響していることと推察されます。

この様な中、優勝した作新学院（栃木）の谷田雅治選手は総合得点で83.900を獲得しました。美しい捌きを心掛けている演技を見ることができました。谷田選手を含め80点台は3名でしたが、他にも丁寧な捌き、雄大な技、見事な着地をみせた終末技など実施する選手を見ることができました。しかし、残念ながら他種目で大過失や落下などにより総合得点が伸び悩んでいたようでした。

全体に感じられたことですが、得点が伸ばせなかった要因の一つとして元来その技に求められる捌き方、例を挙げますと、ゆかでの軸ブレがない跳躍技、あん馬での水平面を維持した旋回、つり輪での力による表現をみせた力技、鉄棒での姿勢欠点のないスイングなど、基本部分を安易な捌き方でおこなうことが増えてきていると感じます。また基礎となる姿勢の表現、倒立の姿勢、つま先の柔軟性、A難度やロンダードなどの難度に満たない技での捌きが疎かになっている印象を受けました。これらはそのままにしておくと技の安定性の欠如やEスコアが伸び悩む要因につながります。日々の練習において、高難度の技を習得する傍ら、必ず確認する意識を入れていただきたいと思えます。

まだまだ様々な制限が解除されず、時間を割いて打ち込むことができない状態が続くと思われませんが、より一層の工夫を凝らして練習に励んでいただきたいと存じます。

以下、種目ごとに採点上の判定基準、意識して欲しい項目などがまとめられています。選手、指導者の皆さまには熟読していただき、今後の競技会への指標にしていいただければと思います。

1. 採点上の打ち合わせ事項

○2022年版採点規則の確認。

・種目特有の評価ポイントの確認

- ① 雄大なアクロバットの跳躍技の先取りのある安定した着地を評価する。
- ② 宙返りひねり技でのゆがみのない正確な実施を評価する。
- ③ グループ I の旋回技や力静止技、柔軟技において丁寧で美しさを表現する捌きを評価する。
- ④ コレオグラフィ的な動きを意識し、リズムカルにフロアエリア全面を使用した演技を求める。

・技の認定、実施に際してはルールに則り厳密に採点する。
・ニュートラルディダクションの確認。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・組み合わせにおいて、2つ目の技で大過失を伴う判定をした場合に加点を与えなかった。
- ・ひねり不足については厳密に判定し、90°以上の不足の場合は低い難度で認定した。
そのため繰り返しとなり不認定となった実施が1件あった。

3. その他特記事項・意見・感想等

全体を通して、コロナウイルスの影響による練習不足で新ルールに対応できる時間が限られていたことにゆかの演技時間が伸びたことも伴い、終末技の着地までコントロールできていた演技が少なく感じた。

53演技中Dスコアの最高は5.8点が3演技、Eスコアの最高は8.60点であった。組み合わせ加点を伴う構成の実施は32演技、そのうち2回宙返りを含む実施が5演技、2種類の組み合わせを含む実施が4演技であった。また、大過失を伴う減点により4演技に加点が与えられなかった。2回宙返り技においては、実施なしが3演技、D難度以上を2種類実施したのは4演技であった。

Eスコアにおいて、宙返り技における着地準備局面から着地、空中局面における脚の開きや姿勢欠点、ひねり不足などの減点が目立った。種目の評価ポイントにもなっているが、先取りのある安定した着地やひねり技での正確な実施を目指してほしい。

また、アクロバット技の前には2秒以上停止してはいけないが、静止技においては2秒間の静止が求められている。そのため、練習の段階で繰り返し計測するなど2秒間というものを感覚として身につけてほしい。

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・2022年版採点規則の確認（技の認定と減点項目について）
- ・腰の位置が高く、雄大かつスピード感のある旋回を評価する。
- ・倒立を経過する技では、停滞や力の使用がなくスムーズに倒立に持ち込む捌きを評価する。
- ・演技全体を通して、安定感のある実施を評価する。

2. 採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

- ・グループⅡ/Ⅲの技において、次の技に続けずに落下したものは不認定とした。（少なくとも半周旋回後の明確な背面支持がみられれば認定。）
- ・フロップ技の連続において途中で落下したものは、すべて不認定とした。（途中で落下せずに次の技に続けた場合は個々のフロップ技の難度を認定。）
- ・倒立下りにおいて、上げた脚が下がったものは不認定とした。
- ・倒立3部分移動下りにおいて、バランスを崩しながら技の終盤に更に1回ひねりを加えた実施は、コントロールされていない捌きと判定し、難度の格上げは認めなかった。

■Eスコアについて

- ・縦向き3部分移動技において、角度逸脱がみられたものは一移動毎に減点をした。
- ・下向き転向（移動）技において、脚開きなどの姿勢不良がみられたものは一転向毎に減点をした。
- ・交差倒立技において、倒立に上げる際に振動を有効に使用していないものや腰まがりが見られるもの、力の使用がみられるものは相応の減点をした。

3. その他特記事項・意見・感想等

今大会は昨年同様にコロナ禍での開催となり、各所属ともに十分な練習量を確保できないまま臨んだ大会であっただろう。その影響からか、今大会のあん馬において、演技者の54%が落下（59名中、落下者32名で落下数45回）するといった、大過失のとても多い大会となった。それに伴い、Dスコアの平均値は昨年大会と同じ4.2であったものの、Eスコアの平均値は6.83といった低い得点となった。また、10技で構成された演技を実施した選手は全体の45%に留まり、多くの選手が8～9技での演技実施であった。新しい一般規則では8技未満で技数不足のNDが発生するが、3名の選手がそれに該当してNDの対象となった。

落下の最も多かった技は、昨年大会同様にマジヤールやシバドといった縦向き3部分移動技であり、特にシバドにおいて技の完了後に旋回に続けられずに落下した実施（不認定）が多かった。しかし、全体を通して大過失は多かったものの、体をまっすぐに伸ばした姿勢でスピード感のある旋回や技捌きを実施する選手の数はここ数年で格段に増えてきている印象を持ったことも事実である。今後はそれらに加え安定感を高めることとDスコアアップを課題として日々のトレーニングに励んでいただきたいと強く感じた。

今大会から新しい規則が適用されたが、あん馬においては高校生にとって特段の影響をおよぼす変更ではなかったためか、規則が正しく認知されており、Dスコアに関する問い合わせはなかった。

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・ 2022 年版採点規則の確認
- ・ 静止時間に対する減点
- ・ 振動倒立技の腕や腰のまがりについて
- ・ 力静止技の角度や姿勢
- ・ 振動からの力静止技での持ち込みの角度について
- ・ 変更となった難度の確認
- ・ 種目特有の減点(美的・実施欠点・技術欠点)の確認
- ・ ニュートラルディダクション (技数) の再確認

2. 採点上起こった事項とその処理

- * 後ろ振り上がり開脚水平支持(2 秒)にて腰の曲がり角が 45° を超えるものは不認定とした。
- * 振り上がり十字懸垂に持ち込む際に 45° を超える肩角度の逸脱や支持のみられた捌きについて不認定とした。
- * 振動倒立技で静止姿勢がなく倒れたもの、 45° を超える脚の下がりについて不認定とした。
- * ホンマ十字懸垂で持ち込む際に 45° を超える肩角度の逸脱が見られるものは不認定とし、その後の十字懸垂で静止時間が満たされている場合は十字懸垂の B 難度のみを認定とした。
- * 伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下り (D) において、伸身とは異なる実施に対して C 難度として認定をした。
- * ジョナサン・ヤマワキにおいて支持が見られるものは不認定とした。
- * 伸腕屈身力倒立において倒立での静止がないものは不認定とした。

3. その他特記事項・意見・感想等

2022 年版採点規則を適応する初めての大会となることから事前の審判打ち合わせでは、新たに追加または変更された事項の確認を入念におこなった。特に力技や倒立等での静止姿勢や静止時間について、厳密に判断するよう審判会議の中で強調して説明した。全体での D score の平均が 4.18、最大 D score が 5.6 であった。また ND が発生した件数が 6 件であり、全て前方及び後方車輪倒立(2 秒)での失敗による不認定からであった。また振り上がり中水平支持(E)を実施した選手が 4 名、難度の上がった十字倒立 (E) を実施する選手が 1 名と高い難度の力技を実施する選手が少ないのは残念に感じた。脚前挙等の単純な力静止技や振動倒立技において静止時間が不足している実施が散見された。個々の技において慌てることなく十分な静止時間が求められる。8 点台にのる実施では、動から静・静から動と明確な静止時間や姿勢、微動だにしない倒立、終末技の着地まで細部にわたって磨かれた演技が評価の値にあった。

小・中欠点をみると、難度表にない技での 2 秒以上の停滞や着地をはじめ、倒立や力静止技の姿勢に持ち込む段階での肘のまがりやベルトへの寄りかかり、体の反り、終末技の姿勢や着地の準備などであった。脚前挙の姿勢や難度表にない技での 2 秒以上の停滞における減点などをはじめとし、これらは普段の練習から意識して取り組んでももらいたく、得点を上げるためには欠かせないものである。その上で、夏のシーズンに向けて D スコアを高める取り組みを期待したい。

1. 採点上打ち合わせた事項

- ・2022年度版採点規則の確認（前ルールを踏襲しており、基本的な考え方は同じであること。）
 - *第1局面での足の開きに対する減点
 - *美しさ・雄大性を表現した演技実施
 - *着地前の先取りが行われているかどうか
 - *意識的に着地を止めた実施かどうかの見極め

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・直前アップまで行ったが負傷をし、本番は演技をせずに0点を取る選手があった。
- ・踏切が合わずに跳馬上に立ってしまい0点になってしまった選手があった。

3. その他特記事項・意見・感想等

グループの大きな変更があったが、個人総合の試合では影響することはほとんどなかった。41%の選手がアカピアンを実施し 22 演技であった。次に伸身カサマツが 20%で 11 演技であった。グループⅢの演技が多くなってしまった背景として、コロナのため練習時間が制限されて、価値点のより高い演技を安定してできていないことが考えられる。そんな中でも優勝したロペスや2位のドリッグスの実施は、姿勢こそ減点される部分はあったが着地までしっかり止めて非常に完成度の高いものであった。高校生の段階から大きな試合で着地を決めていけることは、今後の選手生活にかなりの自信がつくことになるであろう。

グループ	跳躍名	価値点	人数	%
I	ロペス	5.6	2	4
	ドリッグス	5.2	6	11
	アカピアン	4.8	22	41
	伸身カサマツひねり	4.4	6	11
	前転とび前方伸身宙返り 2 回ひねり	5.2	1	2
	ローユン	4.8	2	4
Ⅲ	伸身カサマツ	4.0	11	20
IV	伸身ユルチェンコ 3/2 回ひねり	4.4	1	2
	伸身ユルチェンコ 1 回ひねり	4.0	2	4
	屈身ユルチェンコ	2.4	1	2

1. 採点上打ち合わせた事項

採点規則・競技規則について

- ・2022年版採点規則の確認
- ・ウォーミングアップは各選手に対し50秒が与えられ、口頭によりコールをして伝える。
- ・ウォーミングアップ後に、第1演技者に対して最大で1分間の器械準備の時間を与える。

Dスコアについて

- ・静止技において静止がみられない実施は不認定とする。
- ・実施された技がコントロールされずに（器械上に）落下したものは不認定とする。
- ・後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持やヒーリーの支持局面で大きく肘がまがる実施は不認定とする。
- ・棒下宙返り（ひねり）倒立で、倒立位から45°を超え逸脱した実施は不認定とする。

Eスコアについて

- ・「前振り上がり」や「け上がり」、「モイ」については大きさを求め、支持の際に腰が下がるものは減点の対象とする。
- ・終末局面が倒立位の技における角度逸脱による減点は厳密に行う。
- ・「後ろ振り倒立」は振動を有効に使い、伸身姿勢を保って倒立まで持ち込まなければならない。「後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持」や「ヒーリー」などの後に力を使ったり、腰をまげたりにして倒立に持ち込むものは減点の対象となる。
- ・静止技における静止時間については厳密に判定する。静止時間が短い、または静止がみられない実施は相応の減点の対象となる。
- ・「バブサー」、「モイ」、「ティッペルト」の振り下ろす際の膝の割れや懸垂時の膝の緩みなどの減点は厳密に行う。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・ヒーリーで大きく肘のまがった実施は不認定とした。
- ・「ティッペルト」において、脚部がバー上にのったものは器械上の落下とし、不認定とした。
- ・「ディアミドフ」において、倒立でコントロールできずに落下したものは不認定とした。
- ・前振り上がりひねり倒立において倒立位から45°を超え逸脱した実施は不認定とした。
- ・静止を求められる技において、静止時間が不足した実施は厳密に採点した。

3. その他特記事項・意見・感想等

新ルールが適用される最初の大会であるなか、Dスコアの最高点は5.8、Eスコアの最高点は8.70であった。着地の止められた演技は4演技あり、いずれも後方屈身2回宙返り下り（D難度）であった。演技途中の落下（器械上の落下も含め）や終末技の転倒が多く見られ、一つ一つの技のきめがまだ不十分で不安定感が目立った。手のうごかしやずらしも散見された。

前振り上がりにおいて、腰の高さの意識が感じられた実施もあったが、前方宙返り開脚抜き腕支持など腕支持になる技から繋げる場合、腕支持の受け方に課題がある捌きによりスムーズさに欠け、減点対象となる実施が多く見られた。

今後も夏の大会に向け、Dスコアを高めた演技、課題の克服に努め、一つひとつの技や倒立にきめの感じられる演技を期待したい。

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・ 2022 年版採点規則の確認。
 - * 安定した演技実施を基盤に、高められた D スコアを有する演技を評価する。
 - * 美しさ、力強さを表現した演技実施を評価する。
 - * 着地への準備局面を有し、意識的に止められる終末技を評価する。
- ・ 雄大な手放し技や正確な終末技を評価する。
- ・ 倒立位を経過する技、ひねりを伴う振動技での角度減点の少ない実施を評価する。
- ・ その他
 - * 演技開始の振り出しにおいて 3 回を越えたスイングは減点
 - * 手放し技や終末技の前の車輪での膝まがり実施減点
 - * 倒立になる、または経過する技の角度逸脱について範囲の確認
 - * 手放し技でバーを握る際の腕のまがり、身体の歪みは減点

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・ ヤマワキは、上昇の仕方、腰のまがり具合、ひねりの度合いを総合的に判断した。明らかな腰のまがりが見られた場合や、表現が著しく乏しい実施はボローニン (B 難度) と判定した。
- ・ 伸身トカチェフでバーを越える前に著しい腰のまがり (45° 以上) があつた場合は、屈身トカチェフ (C 難度) と判定した。
- ・ 手放し技において、バーを握る前に身体の伸ばしが不十分な捌きや、バーを握る際に腕のまがった実施、身体が歪んだまま懸垂になるものは実施減点とした。
- ・ 伸身姿勢での終末技において、経過の大部分で腰をまげた屈身姿勢がみられた実施は、かかえ込みと同価値と判定し C 難度とした。

3. その他特記事項・意見・感想等

コロナ禍の影響か、D スコア・E スコア共に例年に比べて低い印象を受けた。実施に余裕が無く、大過失や落下・転倒も散見された。

出場選手 58 名のなかで、D スコア 5.0 以上の選手は 4 名 (前回 8 名)、最高 D スコアは 5.5 (前回 5.8) であった。D 難度以上の技の出現数を昨年度と比較すると、グループ II のヤマワキが難度変更で C 難度となったため、出現数が 70 から 20 と大幅に減少した。その他についてもグループ IV (59→49)、III (21→17) と減少し、グループ I (2→3) はほぼ横ばいであった。終末技で後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下りを実施した演技は 32 演技あり、過半数を超える選手が E 難度の終末技にチャレンジしている事は明るい材料だと感じた。また、今回難度が上がった閉脚シュタルダーや閉脚エンドーを取り入れた演技も多数見られた。

E スコアについては、最高が 8.80 で、上位 10 名の平均は 8.50 であり丁寧な演技を目指している印象を受けた。しかしながら全体の平均は 7.56 であり、やや苦しい演技が多かった。順手背面車輪を実施する演技も一定数あつたが、後方浮腰回転後ろ振り出し順手背面懸垂において、腕と上半身の開き角度が不十分な実施が非常に多く、中欠点以上の実施減点を伴う実施が殆どであった。また、車輪での膝まがり、手放し技後の車輪での肘まがり、倒立位を経過する技やひねりを伴う振動技での角度等だけでなく、シュタルダーやアドラー開始時において、つま先のまがりが目立つ選手が多い印象を受けた。つま先・肘・膝等の細やかな部分を意識して日々の練習に励んでいただきたい。